

人びとが創るもうひとつのアジア

ハリーナ

HALINA

no.50 2023年2月

【特集】
開発の波にさらされる
パプアの人びと、その暮らし

02 【ぼこぼこ 50】
「わかりあえなさ」を積み重ねて
◎松村多悠子

03 【特集】
開発の波にさらされる
パプアの人びと、その暮らし

小さな民のリーダー、デキー逝く
—背負ったパプアの歴史と民衆の交流に託した希望
◎津留歴史

危惧への道 Road to Anxiety
◎アルベルトウス・フェムブリアント

09 【COLUMN】
【西ティモール見聞録①】
友と奴隷と魔術師の地から
◎松村多悠子
【APLAの本棚①】
山本冴里編『複数の言語で生きて死ぬ』他

10 【Topics】
01- 「福島百年未来塾2022」開催報告
◎八田有紗
02- ラオスの輸出用バナナ栽培が
地域の暮らしに与える影響
◎東 智美

12 【PtoP“最前線”】
民衆交易の初志と未来
—堀田正彦遺稿集を読む◎小林和夫

14 【Voice from APLA partners】
From Indonesia
家庭ゴミ回収活動が地域に変化を
もたらしています。

15 事務局だより

16 【振っておきアジア】
インドネシア◎ハリー・ユリ

表紙のこぼれ

カンボジアの首都・プノンペンで出会ったブランケット。センスの良い店主が営むセレクトショップに飾られていたその一枚に一目惚れした私は、それを購入すると同時に、商品についていた『FAIR WEAVE』というタグを頼りに生産者に連絡した。

30代のカンボジア人男性が立ち上げたこのブランドの商品は、カンボジア北部の村の女性達ですべて手織りでつくっている。もともと手織り仕事を伝統的におこなってきた村の女性達の技術を最大限に生かし、より継続的に多くの雇用をつくりたい、と2013年に立ち上げたブランドだそう。デザインに惚れて購入した商品の裏にこんなストーリーがあるなんて、一番カッコイイ在り方だと思う。

出会いから数日、運よく、生産元の村を訪ねる機会に恵まれた。プノンペンから車で7時間。20代～80代の女性達が集まり、糸を巻き、手足を駆使して数種類の織機で作品を仕上げていく様子は圧巻の一言。カンボジア土産にイチオシのブランドです。(大村真理子)

「わかりあえなさ」を積み重ねて

松村多悠子／まつむら・たゆこ
西ティモール生活者

ぽこ

こぼこ」に何を書くのか悩むなか、本を一冊読み終えました。

そこで見かけた言葉について、読後考えています。

「世界を『わかりあえるもの』と『わかりあえないもの』で分けようとするとところに無理が生じるのだ。そもそも、コミュニケーションとは、わかりあえないものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それで

もなお共に在ることを受け容れるための技法である」。(ドミニク・チェン著『未来を作る言葉』新潮社)

インドネシアで暮らしだして通算10年以上。時にボランティア、留学生、日系会社勤務、住所不定無職、NGO職員……と肩書きを変えながら、西はアチエ、東はティモール島に移り住み、現在は住所の所属なしです。この10余年、異質な他者



同士の関わり合いの中で出会った「わかりあえなさ」を思い返してみると数限りない……と言おうとしたものの、改めて考えるとあまり思い出せません。お、これは「わかりあえなさ」を積み重ねるうちに、いつのまにか

デキー・ルマロベンさん。カフェに描かれたパプアの地図の前にて。

特集

開発の波にさらされるパプアの人びと、その暮らし

ハリーナ読者の皆さまにはカカオでお馴染みのパプアは、その豊かな土地と天然資源ゆえに近代化と開発の波にさらされ、先住民族が周縁化されつつつけてきた場所でもある。今号では、長い時間をかけてパプアの人びとと関係を築き、活動・取材を続けてきたおふたりに「パプアのいま」を伝えてもらう。(編集部)

パプアの先住民族が背負ってきた歴史

デキーの生涯は、パプアが背負った歴史から切り離せないものでした。古来より言語や慣習の異なる数百に及ぶメラネシア系の先住民族が氏族共同体を形成し、自給自足の生活を営んでいたニューギニア島。1900年代末、その島はまっすぐ縦に半分割られ、西側をオランダが西イリアンと名付け統治します。第二次世界大戦後、オランダから独立したインドネシアは、西

カ

カオキタ社を牽引してきたデキー・ルマロベンさん(以下、デ

小さな民のリーダー、デキー逝く 背負ったパプアの歴史と民衆の交流に託した希望

津留歴史／つる・あきこ
カカオキタ社アドバイザー

イリアンの帰属をめぐるオランダと激しく対立しました。そして1969年の「自由選択行爲」を経て、西イリアンはインドネシアに併合され、当時のスハルト大統領によりイリアンジャヤ州と命名されました。国連監視下でインドネシアへの帰属を住民に問うという一見すると民主的なプロセスの実態は、インドネシアの影響下で選出された代表者1025名が、政府や軍関係者の前で西イリアン併合に賛成か反対かを表明することでした。

パプア人にとってその「自由選択行爲」は何だったかについて、子ども時代のエピソードとしてデキーが次のように述べたことがあります。彼が育った小さな町でもその儀式が行われ、地元の住民や子どもたちは会場となった講堂の窓辺に群がり外からその様子を一部始終見ていたそうです。その中に小学生だったデキーもいました。国軍

が警備する会場で、地元代表者が次々と前に進み、声を張り上げ「賛成!」と叫ぶなか、唯一、反対を表明した女性がいました。「会場は凍りついた。でもその場にいたすべてのパプア人が心の中でその女性の勇気に拍手喝采を送っていたと思う。同時に自由に意志表示できない屈辱と悲しみの気持ちを子どもでも感じた」とデキーは当時の心情を打ち明けました。実際、大多数のパプア人はインドネシアによる併合に強く反対していました。それは、63年からパプアを暫定統治したインドネシアが武力で先住民民族を威嚇・弾圧したからです。

パプア人の 経済的自立のために

80年代は、インドネシア統治



への抵抗運動が徹底的に弾圧された恐怖政治の時代でした。この頃、デキーは、州都ジャヤブラにある国立チェンデラワシ大学政治経済学部に入學し、同大学の教員であったアーノルド・アプ氏が主宰したパプア文化連帯運動に参加しました。このグループは「マンベサック(輝く鳥)」と呼ばれ、インドネシアによるパプア先住民民族同化政策に抵抗する非暴力運動を展開します。しかし、パプア人から絶大な支持を集めたマンベサックに脅威を感じた政府は、罪状がないままアプ氏を投獄。最後に同氏は陸軍特殊部隊により殺害されました。

デキーはかねてからパプア独立運動の手段に疑問を抱いていました。国軍や警察に対峙して、投獄・拷問・凶弾に倒れるパプア人が後を絶たないことに心を痛め、独立運動の指導者たちに対し、命を尊ばない戦略は間違っているとは批判しました。そんな彼のことを弱腰だと非難する声もありましたが、「ただ独立を叫ぶだけではだめだ。独立するには経済的な自立が必要だ」と考えはじめました。

87年、デキーは「イリアンジ

自立的に守る先住民民族としての尊厳を回復することへの希望を与えたのではないだろうか。デキーは生前、「民衆交易に出会えたことはパプアにとっての救いだ」と話していました。

止まらぬ開発の波に 抗うには

デキーはしかし、パプアの現

実に直面し、期待と失望を繰り返していたと思います。広大な土地と豊富な天然資源に恵まれているが故に、外部から開発の波が押し寄せ、目の前に積まれた現金の誘惑に負けて土地や資源を手放してしまうパプア人がいます。パプア州が分割され、政府に懐柔された地元の長が権力を握り、開発に絡んだ



生産者に「民衆交易の家」について説明するデキー。

ヤヤ農村発展財団(YPM D/現パプア農村発展財団)のワールドスタッフとして働きはじめます。YPM Dは村落部の先住民族の生活を改善することに活動の重点を置いていました。この活動を通して、デキーは先住民族の経済的自立に向けたアイディアを次々に思いつきます。トラック一台を村の女性たちが共同利用し、農産物を町の市場で売るプログラム。そしてその売り上げの一部を銀行に貯金する貯蓄プログラムなどです。コミュニティに変革を起こすには、まず、女性がチャンスを得て、力をつけることが大事だと考えました。また、パプア人コミュニティでお金が循環するように協同組合を形成し、組合が経営するスーパーマーケットを作りたいという構想も描いていました。

国境を越えた人と人との 交流、民衆交易へ

90年代半ば、デキーは民衆レベルの交流に関心を持つ日本人の訪問を受けます。当時上智大学で教鞭をとっていた村井吉敬氏(2013年没)でした。日本の政府開発援助が発展途上国の

汚職が蔓延しています。パプア社会のなかで格差と分断が広がっているのです。カカオの現場でも、政府の物質的援助に惑わされ「民衆交易の家」から離れていった生産者もいました。それでもデキーは、人間のどうしようもない弱さも引き受けながら、熱意を込めて「援助に頼るな、経済的に自立することが真の独立だ」と語り続けました。

デキーが亡くなった後、パプアは新たな開発の圧力にさらされています。カカオ産地のひとつであるブラップ村に、8つの県から州都ジャヤブラに通じる幹線道路が村を貫き、この地域を内陸部から沿岸部への人とモノのハブ(結節点)にする計画が降ってきました。現在、道路工事が急ピッチで進められています。このようなハブはジャヤプラの他地域ですでに存在していますが、ハブになった土地は華人に買い占められ、そこに乱立する商店はこの華人の土地を借りた移住民が経営しています。パプア人が手掛けるビジネスはひとつもありません。

ブラップ村や周辺地域はこの数年で大きく変わることを余儀なくされ、幹線道路予定地に家

人権侵害や環境破壊を引き起こしているとは批判し、開発を押し付けるのではなく、現地の人びとの声に耳を傾け一緒に考えるべきだ、と語る村井氏の姿勢にデキーは共感しました。そして「私たちに何ができるか」という問いに、デキーは「パプアに日本の人たちを連れてきてください。そしてここで何が起きているか、人びとが何を思っているかを知り、『目撃者』になってください」と答えたのです。そこから村井氏は学生や市民を継続的にパプアに連れてきました。デキーは「パプア・エコツアー」と名付けて、米国フリーポート社の鉱山開発により強制立ち退きさせられた人びとの町や、天然ガス開発が予定されているビントゥニ湾で漁を営む人びとが生きる現場などに案内しました。このツアーが契機とな

道につながりました。2012年、「児童労働のないチョコレートを食べたい」という日本の消費者の声がきっかけとなり、オルター・トレード・ジャパン(ATJ)がパプア産のカカオを原料としたチョコレートを日本の生協に向けて販売しはじめます。現地ではデキーを代表とする事業体カカオキタ社が設立されました。デキーは村落部のカカオ生産者が民衆交易の意義を理解しやすいようにと、民衆交易を生産者と消費者、カカオを媒介する事業者などが住む「家」に例えました。デキーが描いたこの「民衆交易の家」では、小石を積んだ土台は「友情と連帯」であり、屋根は互いの支え合い、家を支える柱はそれぞれの責任を意味しています。家の中ではテーブルを囲んで話し合う人間がいます。それはデキーが思い描いた平和な世界の構図――多様な人間が交流し、共に未来を見据えながら現在を考えること――でした。そこに暴力や強制はありません。あるのは互いに尊重する関係性です。

国境を越えた人と人との交流は、後にカカオの民衆交易への

民衆交易を通じた連帯は、虐げられた歴史からパプアの人びとが解放され、自然と暮らしを



道路工事が進むブラップ村。

を持つ人は立ち退きを迫られるでしょう。移住民が大挙して押し寄せ商売を始めるでしょう。今までのパプアでの開発にありがちな「地元住民が周縁に追いやられ傍観者になること」をどうしたら阻止できるか、開発を逆手に取ることはできないか、と村人は考えを巡らせています。森を守る闘いも熾烈になるでしょう。道路ができるとその周辺の森林が伐採され木材として運びだされるのは、今までの開発の例から想像に難くありません。村人たちは森にもっとカカオを植えて、生産林であることを主張しなければならぬと考えています。

最後に、デキーが亡くなる4日前に、あるセミナーの参加者

向けに発したメッセージの一部を紹介します。「パプアには否が応でも大きな変化が起きる。その変化が押し寄せる時に、パプア人がバラバラではだめだ。それぞれが謙虚に、パプアの地での変化と発展、社会変革のために貢献しなければならぬ。自分たちではできっこない外からの考えに追従しない方がいい」。そしてデキーは、「自分は死んでもどこにも行かない。ここに(村)にいるよ」という言葉を村人たちに残して、神のもとへ向かいました。■

【注1】カカオ(cacao)とはインドネシア語で「私たち」という意味で、生産者だけでなく、食べる人つなぐ人パプアの自然を愛めた「私たちがカカオ」という意味が込められている社名。パプア人のアイデンティティーを多様な民族の韻や踊りから発掘する活動。



①山岳パプア州ジャウウィジャヤ。ワメナ、バリエム渓谷にあるパプア先住民族の昔の家。現在、多くのパプア先住民族は、政府が援助プログラムと称して建設した家に住んでいる。



②中央パプア州ミミカ。未完成のままとなっている道路でぬかるみにはまったバス。インフラ開発プロジェクトには、汚職がつきもの。



③中央パプア州ミミカ。鉱山会社の操業用道路に使用する堤防を建設するため、鉱山操業地域の複数河川の流れが堰き止められている。写真右上が堰き止められている箇所。



④中央パプア州ティヤイ。新特別自治区の区長を迎える治安部隊。特別自治法が引き金となり、パプアに新たな自治区が発生した。

⑤西パプア州マノクワリ。マノクワリからソロンを結ぶパプア幹線道路沿いにある2万6429haのアブラヤシ農園。



⑥南パプア州ボベン・ディグル。アブラヤシ農園地域の境界を示すモニュメント。



⑦南パプア州メラウケ。複数のパプア先住民族が、身を休める木を見つけるのに困っている鳥たちの話をした。幾人かは、飛ぶことに疲れた鳥の姿を見たという。鳥や他の動物が身を休める場所を見つけることが困難になるとは、なんと大きな規模の森林破壊だろうか。

危惧への道

アルベルトウス・フエムブリアント
Freelance photojournalist and visual storyteller

Albertus Memoriantio

Road to Anxiety

この視覚的調査取材は、私たちの時代における最も緊急を要する問題への取り組みとして行っています。

このプロジェクトは、パプアニューギニアとの国境線まで、4330キロメートルにも及ぶインドネシア領パプアを横断するパプア幹線道路プロジェクトの影響を調査するものです。パプア島（ニューギニア島）の半分は、インドネシア領に属し、マングローブや泥炭湿地などを含む原生林が広がり、他の熱帯の島々に比べても多くの植物種が見られます。そこは確実に、パプアの多様な先住民族の文化が息づいている場所と言えるでしょう。

デイビット・ガヴォーとダグラス・シールが学術誌『バイオロジカル・コンサベーション』（2021年9月7日号）に発表した研究によると、2019年時点でインドネシア領パプアの83%の地域が森林地帯であることがわかりました。これはインドネシアの森林



⑧中央パプア州ハニアイ。政府によるパプア幹線道路プロジェクトは孤立した地域へのアクセスを可能なものとした。幹線道路の開通により村は空っぽとなり、高齢者と子どもたちだけを残すことになった。生産世代の者は近くの町に行き、近代化を担う一員となる。しかし、彼らのうち多くが学校にも通えず、仕事もなく犯罪に手を染めている。

の42%を占め、アジア太平洋地域で最大の原生林が手つかずのまま残っている地域です。

この研究ではパプア幹線道路プロジェクトの影響により、2036年には総面積3429万haの森林のうち450万ha（約13%）が失われる可能性があると予測しています。このような状況は、深刻な気候変動の引き金にもなるでしょう。

過去20年間、パプア幹線道路はプランテーション、森林伐採、鉱業などの土地利用型産業に利益をもたらしてきました。その影響により、森林破壊が進み、パプア先住民族の暮らしや文化遺産、社会的規範が破壊されることになりました。インドネシア環境フォーラム（WALHI）の調査によると、2001年から2019年にかけてのパプア幹線道路の建設により、2万2009haの自然林が失われたといわれています。天然資源や森林の開発が優先され、パプア先住民族の暮らしが危うい状況に陥っています。

2016年に開始したこの現在進行形のプロジェクト「危惧への道」は、発展的で近代的とされる世界のために犠牲となっているパプア先住民族コミュニティの生きるストーリーを収集するための取り組みです。

西ティモール見聞録

01

松村多悠子／まつむら・たゆこ
西ティモール生活者

友と奴隷と魔術師の地から

「ティモール」とインターネットで検索してみると、東ティモールとティモール島のTimor-Lesteが並び、以降は東ティモール関連のページが続きます。「ティモール」といえば「東ティモール」、しかし東があれば西もある。さて、西ティモールとはどんなところでしょうか。

私の住む西ティモール・ベル県都アタンブアは、インドネシアに属し東ティモールとの国境イミグレーションからバイクで30分強の内陸部に位置します。インドネシアの大都市で「西ティモールのアタンブアから来た」と言つと「ああ、独立したところ」と言われ、東ティモールと勘違いされることも多い小さな町です。ここでは、公用語であるインドネシア語のほか現地の言葉であるテ

トゥン語なども話されています。といっても東ティモールの公用語であるポルトガル語の影響を受けたテトウン・プーラサではなく、テトゥン・テリックと呼ばれる東西の国境地域で多く話されている外国語の影響が少ないものです。県名である「ベル」は「親しい友」を意味します。島の中央と西側の飛び地に国境線が引かれる前から周辺の多民族が集まるこの地で、人々は互いに「ハイ！ベル（ベルン！）即ち「友よ！」と呼びかけ合い、それがいつしか地名となった、と土地の人は言います。



アタンブアから国境イミグレーションの途中にある海岸付近。

交錯の地・ベルには元東ティモール住民も多く住んでいます。彼らは1999年の独立を問う住民投票後に避難民としてやって来た後、インドネシア国籍を選び、定住することにした人びとです。また、アタンブアとは、atan（奴隷）、buan（魔術師）という2つの言葉から成ります。現在のアタンブアにあたる場所には奴隷や魔術師へと疑われた者が集められる市場があり、集められた奴隷や魔術師は縛られ、北の港アタプブから船で運び出されたと言継がれています（細かなバージョン違いあり）。次回からは、このような土地に暮らすなかで出会う、文化慣習などのあれこれを紹介していきます。



④ バプア州（現山岳バプア州）ジャヤウィジャヤ、2019年。親族の家に身を寄せることになったンドウガ難民。2018年12月2日、イスタカ・カルヤ社の労働者16人を殺害したエキアヌス・コゴヤ率いる武装犯罪グループによる武力暴力事件を発端にジョコ・ウィドド政権が軍事作戦を展開。これにより、数千人のンドウガの住民がジャヤウィジャヤに避難させられた。



④ 南バプア州ボベン・ディグル。10歳のサメラは学校へ行ったことがなく、祖母と一緒にアブラヤシ農園で働いている。

インドネシア人写真家、アルベルトウス・フェムブリアント氏による「危惧への道」（英題 Road to Anxiety）は進行中のプロジェクトです。下記ホームページで、今後の進展や誌面に掲載することができなかった多数の写真、その他のプロジェクトが確認できます。

Website : <https://www.albertus-vembrianto.com/> E-mail : vembriwaluyas@gmail.com

□ APLAの本棚

『ハリーナ』編集委員が読者の皆さんにお薦めする一冊です。

1

平川克美著『共有地をつくる——わたしの「実践私有批判」』(ミシマ社)
私有財産なしで、機嫌よく生きてゆく。銭湯、食堂、喫茶店、縁側……誰のものでもあり、誰のものでもなく。『小商い』の終着点を描いた私小説的評論。
何でもかんでも自分のものにしてしまおうという「私有」をやめて、意識的に社会の共有物を増やしてみる。私も少しずつ実践してみたいと思います。【野川未央】

福田晴子著『宮本常一の旅学——観文研の旅人たち』(八坂書房)
宮本常一のもと、「旅して学ぶ」という社会実験が「日本観光文化研究

花崎皋平著『生きる場の思想と詩の日々』(藤田印刷工クセレントブックス)
年齢90歳を迎えたその生涯をかけて思想・哲学・詩作と格闘し今も思索し続ける現役著者による「紙碑」の集大成！北海道における「反戦・平和・社会」運動の軌跡と、戦後から現在にいたる著者の精神的歩みを日記をもとに摘録。

花崎さんの90年の生涯のそれぞれの時を丁寧に読みながら、おこがましいながら自分史にも重ねて、見えなかった真実が見えてくることもあるのかなと感じています。【弘田しずえ】

山本冴里編『複数の言語で生きて死ぬ』(くろしお出版)
地球には7000もの言語がある。人は、社会や歴史と複雑に絡まりあう言語に束縛され、翻弄されながらも、また言語によって道を探り拓いてゆく。言語の境界に生きることをテーマに、人間の生と死についてその想いや出来事を描く。

『あいだ』を生きざるをえなかった人たちの物語が、そこに生きることにへと私たちを誘う(『77頁 あつち側とこつち側が交錯する周縁であり「あいだ」の地に惹かれ、国境の町に住んでいます。ここから見えるものに一層目をこらしてみよう、と思います。【松村多悠子】

「福島百年未来塾2022」開催報告

まとめ

八田有紗／はった ありさ
APLAインターン／早稲田大学在籍

基調講演①

飯田哲也さん

NPPO法人環境エネルギー政策研究所所長

飯田さんの転機は、30代で北欧に行ったことでした。原子力から抜けようと努力している北欧を見た飯田さんは、日本で新しい政策づくりや地域エネルギーづくりに携わります。「再生可能エネルギー100%は低コストで実現できること」が研究者の学説の主流になっている」と、太陽光発電のコストが大幅に下がっているというデータを見せつつ語ってくださいました。

一方で、世界史上最悪級の原発事故を起こした日本が、未だに原子力発電に固執しているのも事実。放射能影響が矮小化されていることへの懸念も伝えられました。

最後にデンマークとドイツの市民による再エネの動きの紹介があり、世界の知性とながつて未来を創ることの重要性を語られていたのが非常に印象的でした。

基調講演②

佐原真紀さん

認定NPPO法人ふくしま30年プロジェクト理事長

佐原さんは原発事故後、市民による放射能測定所に関わるようになり、2019年からは福島市議としても活躍されています。事故発生直後から、放射能に関する専門家の様々な意見が飛び交うなか、ふくしま30年プロジェクトは、独立した立場で測定活動を行ってきた団体です。放射線量の測定・記録に加え、子ども向けの放射能ワークショップ、お母さんたちのための交流会、子どもたちの自然体験などの活動も実施してきました。

原発事故後の放射能の問題について、不安を抱えている方たちと問題ないと考ええる方たちのそれぞれの思い・見解の違いによる分断が地域の中で起きてしまっている現状は、コロナ禍の状況とも重なるところがあると感じているとのこと。何が正しいのかの答えが出ないことへの対応の難しさは、私たち誰もが共有している課題であり、福島だけの問題でないことを改めて感じました。

事例報告と パネルディスカッション

大内督さん（一般社団法人二本松有機農業研究会代表）と遠藤美保子さん（社会福祉法人ちいろば会理事長）から、それぞれ農に携わる立場、子どもに関わる立場としての事例報告をしていただきました。

二本松有機農業研究会は二本松市で有機農業を続け、消費者へ直接届けていますが、東日本大震災での原発事故で個人のお客さまは6割減少してしまったそうです。大内さんは原発事故を契機にエネルギーに関心をもち、APLAとの出会いや2012年の「福島百年未来塾」などを経て、ドイツの再エネの現場を視察しました。試行錯誤を続けるなか、今回の基調講演者である飯田さんに「新しいことを始める時は、まずは必ず成功できる小さなことから始めて仲間を増やすのがいい」と後押ししてもらい、営農型太陽光発電（ソーラーシェアリング）に取り組むことになりました。

遠藤さんは、「震災後、孤立をしている、取り残されたという思いが強かったところ、APLAの皆さんとの交流に励まされた」と語られました。APLAが震災後に始めた福島県内の子どもたちにフィリピン産のバランゴンバナナを送る活動でつながってきました。今回の事例報告では、年に1回の食事調査についての報告がありました。震災から月日が経てば、



左から遠藤さん、大内さん、佐原さん、飯田さん、そして司会の近藤恵さん。

食材について心配する人はやがてゼロになると考えていたそうですが、この3年間は「現状について心配だ」という保護者の割合が少しずつ増えているとのこと。今は、心配という意見があってもいいんだと理解していると話されていました。

4名の登壇者によるパネルディスカッションでは、食の安全やエネルギーの問題に向き合ってきた皆さんの苦悩も伝わってきました。しかし、それぞれの取り組みが地域の人びとの大きな支えになっていることは言うまでもありません。数々の苦難を経て、よりよい解決策を模索する皆さんのお話に、大変勇気づけられました。■

詳細は <https://www.apla.jp/archives/8824>

ラオスの輸出用バナナ栽培が地域の暮らしに与える影響

東智美／ひがし・さとみ

埼玉大学人文社会科学部研究科 准教授

「お 掛けになつて。バナナでもどうぞ」

客間に腰をかけると、まず水とバナナを勧められる。都市でも田舎の村でも、ラオス人のお宅を訪問すると、よく遭遇する光景だ。バナナはラオス語で「クアイ」というが、クアイ・ナムム（水バナナ）、クアイ・カイ（卵バナナ）、クアイ・タニー（テナガザルのバナナ）、クアイ・ティープ・ジャン（月を漕ぐバナナ）……と実に多様な種類のバナナが市場で売られているし、軒先にバナナを植えている家もよく見かける。

輸出用バナナの栽培事業の拡大による問題

ラオスの人たちにとって馴染み深い果物であるバナナだが、ラオスの工業・商業省によれば、2020年のバナナの輸出額は2億2740万米ドルに上り、輸出用農産物のトップの座を占めている。東南アジア唯一の内陸国であるラオスは、日本の本州ほどの国土に727・6万人（2020年）が暮らす小国である。20

30年までの上位
中所得国入りを目指し、自給的な農業から外貨獲得につながる商品作物栽培への転換も奨励されてきた。2005年に北部ルアンナムター県で、キャベンディッシュ種バナナの商業栽培が開始され、北部各県に広がった。2013年にはラオスから中国へのバナナの輸出量が急増した。ラオスで栽培されるバナナの9割近くは中国へ、残りはタイに輸出されている。ほとんど農業を使うことなく栽培されてきた国内消費用のバナナとは異なり、輸出用のバナナ栽培は、農業を多用すること、土壌・水の汚染や健康被害を引き起こす。また、大量の水を使うことによる周辺の水田耕作者などとの水争い、出稼ぎ労働者（中国人、ラオス人）と地元住民とのトラブル、労働者キャンプでの麻薬の蔓延、水田など食糧生産のための耕作地からバナナ農園への転換による食糧



ラオス・ウドムサイ県で中国企業が経営するバナナ農園の労働者キャンプの様子。（2022年8月筆写撮影）

安全保障への脅威といった問題が指摘されてきた。

貨幣経済が広がる ラオスの農村部で

安価な地代と労働力、緩い農業規制などの有利な条件を求めてラオスに事業を拡大する中国企業や、外貨獲得を目指すラオス政府だけでなく、バナナ農園に農地を貸す地権者や出稼ぎ労働者も、バナナ事業に参加する動機がある。筆者が調査をおこなった北部ウドムサイ県では、長年にわたる飼料用トウモロコシの連作で、土壌が劣化し、生産性の減少に反比例して、除草にかかるコストが増大している。同時に、子どもの教育費や医療費など、現金収入の必要性も増すなかで、インフオーマルな金貸しからの高利の借金を抱える家族も増えている。そうしたなかで、1〜2haの農地をバナナ農園に貸し出せば、地代として、農民にとってはまとまった額の現金収入を得ながら、家族の労働力を残った農地に集中することができると。短期的に見れば、農家にとってはある意味では合理的な選択であるとも言える。また、出稼ぎ労働者を輩出している

山岳部では、政府が焼畑移動耕作による陸稲の栽培を抑制し、村落合併や村落移転政策等によって十分な焼畑地の確保が困難になっている。山岳部でも現金収入の必要性が増加しており、それらが出稼ぎ労働者を送り出す要因となっている。バナナ栽培事業の環境影響の大きさから、2017年に大規模バナナ栽培への新規許可認可停止を命じる首相令が出されたが、その後、禁止措置は形骸化し、バナナ農園は拡大している。また、バナナ栽培が停止された土地にマンゴーが栽培され、同じように農業を多用するといった事例も見られる。長期的な土地利用計画なしに、政策上バナナ栽培を規制しても、現金収入源の喪失や、返還された土地の再区分をめぐる住民同士の土地紛争など、新たな問題を生み出すことにもなる。

短期的には、農業の規制・モニタリング、麻薬対策といった環境・社会影響への対応が求められると同時に、包括的な調査と長期的な土地利用計画が必要である。そして、グローバル化の中で急速に貨幣経済が広がるラオスの農村で、物質的に豊かな暮らしを求め、健康被害や環境汚染といった長期的なリスクを抱えることになっているラオスの小規模農民の姿は、先進国で暮らす私たちにとっても、持続的な産業と暮らしのあり方という難問を突きつけている。■

オ

ルター・トレード・ジャパ
ン（ＡＴＪ）初代社長、堀田
正彦の遺稿集２冊が出版さ
れました。堀田の論考、講演や対談、
座談会などを編集した『人から人への
交易』、そしてＡＴＪ取締役会や生協
に向けて書いた数々の民衆交易品開発
の提案・企画・報告書を中心にまとめ
た『民衆交易』始まりの物語』です。

アジア太平洋資料センター（ＰＡＲ
Ｃ）時代からの同志である武藤一羊氏
は「堀田は一貫して演出家だった」
と回顧しています。「彼は劇場の芝居
を演出した、デッサ・ケサダとネグロ
ス・キャンペーンを演出した、そして
民衆交易という経済活動さえ演出し
た。次々に出会いを手掛かりに舞台を
広げた。〈中略〉外から見れば運動、貿易
しかし堀田は、それをずっと芝居とし
て構成してきたのだった」（追悼集より）

国際協力と消費者運動の出会い

１９８５年１２月、フィリピン問題連
絡会議（ＪＣＰＣ）はフィリピンの民衆
運動からの呼び掛けを受けてネグロス
の飢餓問題に取り組むことを決め、運
動事務局として「日本ネグロス・キャ
ンペーン委員会（ＪＣＮＣ）」を設置す
ることにしました。そのキャンペー
ン担当者として白羽の矢が立ったのが、
アジア民衆演劇に深くかかわって
いた堀田でした。彼が立てたキャンペ

民衆交易の初志と未来 ——堀田正彦遺稿集を読む

小林和夫／こばやし・かずお
（株）オルター・トレード・ジャパン 広報室



キャンペーン活動の一コマ。デッサ・ケサダ（前列左）と。（１９８６年／当時３８歳）

り産直運動を展開する日本の生協・産
直団体などとの出会いが生まれ、マス
コバド糖の輸入につながります。そし
て現地の実状をもっと知ろうと８７年９
月、グリーンコープの前身である共生
社生協の組合員がネグロスを訪問しま
す。共生社生協では「いのち、暮らし、
自然を守る」ことを基本テーマとして
いましたが、ネグロスの人びとから
は「いのち、暮らし、自然」は組合員
だけのものなのか、それともネグロス
の人びとも含まれるのか問われました。
また、先進国（北）の消費者の「いのち、
暮らし、自然」はフィリピンなどの途
上国（南）の「いのち、暮らし、自然」
を根こそぎにし、それと引き換えのも
のだったという事実を知って衝撃を受
けた組合員の思いが民衆交易事業につ
ながり、その輪は他の生協にも広がり
ていくのです。

コトからモノへ、モノからコトへ

８９年、「ネグロスバナナの輸入事業
を担う事務局」として、生協などの出
資によってＡＴＪが設立されます。堀
田と二人三脚でバナナ民衆交易立ち上
げに精力を傾けた兼重正次グリーンコ
ープ連合専務理事（当時）から「生協運
動はモノにこだわら過ぎていないだろ
うか。いいもの、安心安全なもの、正
しいものばかり主張している傾向があ
るのではないか。それと裏腹に、私た

ちを取り囲む世の中のコト（がら）が忘
れ去られている。モノからコトへの転
換が必要になっている」「生協がバナ
ナ生産者と連帯するというのは、これ
までモノにこだわってきたわれわれが
これからはコトにこだわっていくこと
の先例になる」と聞きます。日本にな
かった無農薬の地場バナナがネグロス
島にあり、フィリピンのしぶとい民衆
運動があつて、かつ日本に新しい市民
の生協Ⅱ共同購入運動のネットワーク
があつたという基本的枠組みの中で、
初めて「モノとコト」が出会ったと堀
田はみています。そして、本当の仕事
というのは、一つのモノを完成させ

ることではなく、コト
をモノに転化し、また、
そのモノから、またコ
トが生まれ、また、そ
れをモノにしていこう
とする、いわば限りの
ない永続的な作業であ
り、どうしたらモノと
コトが出会える枠組み
を新しく発見できるのか、という構想
力が大事だと話します。

その後、堀田は次々とモノ（民衆交易
品を開発し、コトを仕掛けていきま
す。環境に優しい粗放養殖のエコシェ
リン産地では、日本の石けん運動に



人から人への交易
堀田正彦・民衆交易への挑戦
堀田正彦著
オルター・トレード・ジャパン編、亜紀書房



ものからことへ、ことからものへ
「民衆交易」始まりの物語
発行：オルター・トレード・ジャパン

学びミニプラントで石けんを作り、エ
ビ加工場内での使用や地域への普及が
できないか。反原発や反グローバリゼ
ーションという市民運動というコトが
それ自身として体现されている「ゲラ
ンドの塩」というモノを通じて、欧州
の市民運動と日本の消費者運動をつな
げられないか。パレスチナのオリーブ
オイルというモノを通じて、平和や紛
争、占領、人権などのコト問題を日本
人が理解する契機にできるのではない
か。焙煎したコーヒーを生協に売ると
ではなく、コーヒー生豆を生協組合員
によるワーカーズ・コレクティブが焙
煎して商品化し、それを生協に売った
らどうか。常にコトからモノへ、モノ
からコトへ発展させようというところ
に、フェアトレードとは違う民衆交易
の本領があるのだと思いました。

消費者の決意と生産者の意思

ＡＴＪの最も新しい民衆交易品であ
る「パプアのカカオ」。カカオ豆を集

荷し、加工・輸出しているのはカカオ
キタ社です。カカオキタとは「私たち
のカカオ」という意味です。実はフィ
リピンやインドネシアを含むマレー系
の言葉では、２種類の「私たち」「キ
タ」と「カミ」があります。「キタ」
が話し手も聞き手も全部含めての私た
ちを示すのに対し、「カミ」は聞き手
を含みません。カカオキタは生産者だ
けではない、消費者も一緒という「私
たちみんなのカカオ」という意味を込
めて、代表のデキー・ルマロペンさん
らが付けた名前です。そこにはネグロ
スで「カミ」か「キタ」が問われたお
互いの「いのち、自然、暮らし」を守
るんだという消費者の決意、その思い
を受け止めた生産者の意思がしっかり
と引き継がれていると感じます。

２冊の遺稿集には民衆交易の初志を
知り、未来を考える材料が詰まってい
ます。是非、お手に取ってお読みくだ
さい。■



カカオ生産者から歓迎を受ける。（２００９年／当時６１歳）

私が初めて訪れた「インドネシア」は、首都のジャカルタでも観光地のバリでもなく、パプアでした。津留歴子さんによる特集記事に書かれている通り長年パプアを歩き続けていた村井吉敬さん、そして当時のATJ社長であった堀田正彦さんたちにくっついて、大学を卒業する春休みにパプア西部(龍の頭のようにも見える地域)を訪問し、その時にデキーさんとも知り合いました。彼が大好きでよく弾き語ってくれた「Tanah Papua (パプアの大地)」で唄われている「神秘に満ちた山々と谷、私が崇拝してやまない美しい自然」という風景が近代化や開発という名の元に急速に失われつつあることは、私たちの暮らしと無関係ではありません。海を越えた「友情と連帯」を紡ぎ続けていきたいと思います。(野川)

特集への寄稿を依頼した際、インドネシア人写真家のアルベルトゥスさんはちょうどパプアの山間部にて取材中でした。帰宅してから改めて話していると、「進行中のプロジェクト、“Road to Anxiety”と名付けてるけど、Anxiety(危惧・不安)をCatastrophe(大惨事)にすべきかと今回の取材で思わされたよ」と吐露しました。2022年、インドネシア領パプアは11月に3州、12月にさらに1州が新設され、既存の2州から6州まで増えました。この分割統治の一環でパプア内の連帯が阻まれたり、開発のための許可発行の増加が懸念されます。デキーさんの「『目撃者』になってください」というメッセージにどう答えられるか、と考えています。(松村)

ハリーナ HALINA

2023年2月号 vol.02-no.50
2023年2月1日発行

【編集者】
安藤文将
野川未央
松村多悠子

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
(tel.) 03-5273-8160
(fax.) 03-5273-8667
(e-mail) info@apla.jp
(URL) https://www.apla.jp

【印刷】
有限会社だいもん印刷

事務局だより

事務局の動き (2022年7月～2022年12月)

7月 2日	つながりインターンシップ。キックオフ集会(オンライン)に野川と福島が参加しました。
7月 20日	桜美林ガーデンヒルズ試食会で規格外バランゴンバナナの販売をしました。
7月 31日	イラストレーターの山福未美さんを講師にお迎えし、小学生対象のバナナアートワークショップを開催しました。
8月 6日	開発教育協会d-lab2022の自主ラウンドテーブルで福島が「あまいバナナの苦いお話」を担当しました。
8月 6日	桜美林大学オープンキャンパスに出店しました。
8月 7日	ぼこぼこバナナプロジェクト公式ウェブサイトオープン!
8月 18日	千葉県浦安市の学童とネグロスのバナナ生産者のオンライン交流を実施しました。
8月 22日～30日	野川が、インドネシア(南スラウェシ、東ジャワ)に出張しました。
8月 28日	桜美林大学オープンキャンパスに出店しました。
9月 3日、4日	ぼこぼこバナナマーケットをhako galleryで開催しました。3日には、KYEUMと共催のトークイベント「ここでしか聞けない!!?フェアトレード&フードロス」を開催しました。
9月 9日	みんなふえ(東京都葛飾区)にて、バナナについてのお話を野川が担当しました。
9月 10日	APLA理事会・評議員会を開催しました。
9月 15日	立命館大学「平和人権フィールドスタディ」の事務所訪問がありました。
9月 17日	二本松有機農業研究会、アーユス仏教国際協力ネットワークとの共催で「福島百年未来塾2022」を開催しました(ハイブリッド)。
9月 21日	バルシステム埼玉エシカルテーマグループ主催のコーヒーワークショップで福島が講師を務めました。
9月 29日	エスコープ大阪主催のカカオワークショップ(オンライン)で野川が講師を務めました。
9月 29日	川村学園女子大学の齋藤ゼミ(オンライン)で野川と福島がお話をしました。
10月 12日	グリーンコープfromネグロス学習会(オンライン)で野川が講師を務めました。
10月 12日	バルシステム埼玉エシカルテーマグループ主催のバナナワークショップで福島が講師を務めました。
10月 14日	バルシステム生活協同組合連合会「地域づくり基金」の活動報告会に野川が参加し、インドネシアのKONTINUの代理で活動報告をおこないました。
10月 26日～11月 22日	グリーンコープfromネグロスセミナーが11カ所で開催されました(島根、おかやま、さが、みやざき、くまもと西、くまもと東、やまぐち、かごしま、ひょうご、おおさか、おおいた)。
11月 3日	「2022年第24回町田発夢広場」に出店しました。
11月 5日	六会市民センター(神奈川県藤沢市)主催のバナナワークショップで福島が講師を担当しました。
11月 9日	新潟食料農業大学の「フード分野からの食料産業(生態系サービス論)」で福島がバナナワークショップを担当しました。
11月 12日	生活者ネットワーク葛飾で野川がフェアファイナンスガイドについての講座(オンライン)を担当しました。
11月 17日	キッチンハリーナ、斗々屋(共に京都市)を福島が訪問しました。
11月 18日	風"s、フェアトレードショップ・オゾン(共に名古屋市)を福島が訪問しました。
11月 18日、19日	アジア民衆基金(APF)理事会、総会が開催され、市橋共同代表がオンラインで参加しました。
11月 19日	フェアトレード&地産地消みずのわ(岐阜県垂井町)を福島と野川が訪問しました。
11月 20日	納々屋(東京都調布市)主催のバナナワークショップで福島が講師を務めました。
11月 28日	目白大学で野川が講義をしました。
12月 1日	バルシステム埼玉「平和募金贈呈式」に野川が出席しました。
12月 2日	筑波大学「国際学Ⅲチュートリアル・オンライン公開講演会」で野川が講師を務めました。
12月 17日	APLA理事会・評議員会を開催しました。
12月 26日～	冬季休業

事務局からお知らせ

NPA×APLA共催講座「村井吉敬の小さな民からの発想」

●Part.6 (2022年7月～9月)

全6回開催。講師は、中村尚司さん、福家洋介さん、角田季美枝さん、鈴木隆史さん、北窓時男さん、内海愛子さん

2023年3月からは、Part.7がスタートします。

詳細は公式サイトをご確認ください▶ <https://npa-asia.net/>

ぼこぼこバナナプロジェクト

公開ミーティングを毎月1回開催、baba kitchen(東京都新宿区)に第2・第4土曜に出店。



村のゴミ処理場の説明をする住民組織代表のゴフリンさん。



「コンポストや石けんづくりにも関心がある」と語るカラングニャル村の女性たち。

ウエシで家庭ゴミの回収活動を開始したKONTINUのメンバーがゴミ処理場の運営について学ぶためにカラングニャル村を訪問しました。また、12月には、三輪自動車を改造したゴミ回収車が同村の住民組織に送られ、活動のさらなる広がりが期待されます。(野川未央／APLA事務局)

From Indonesia インドネシア 家庭ゴミ回収活動が 地域に変化を もたらしています。

2022年8月、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミック以降2年半ぶりにインドネシアの活動地を訪問しました。

東ジャワ州シドアルジョ県では、はじめに2021年からKONTINUがゴミ回収活動の支援を始めたカラングニャル村を訪問しました。東ジャワへの玄関口となるスラバヤ空港にほど近い同村は、人口約5000人(1650世帯)で、村の面積の多くをエビ養殖池が占めています。村では、2016年から独自に家庭ゴミの回収活動をおこなってきましたが、予算の問題、そ

して何よりも住民の意識を変えることが難しく、回収率は約20%ほどだったとのこと。昨年KONTINUとの協同を開始してからは、回収率は70%ほどにアップしたそうです。

村有地に造られた簡単なゴミ処理場も見学しました。村の住民組織(KSM)が回収したゴミをそこで細かく選別しており、プラスチック各種、瓶、缶、紙類は売却し、食品残渣は液肥にしています。最終的に売れないもの・活用できないゴミだけを焼却していました。選別を待つゴミの山を前にしても(その日の朝に集めてきたばかりのゴミだから、と言っていました)それほど

臭いは気にならなかったものの、すごい量のハエが飛んでいて、すべて手で選別するのは本当に大変な作業だと感じたので、今後は、それぞれの家庭からゴミを出す時点での分別を進められるといいのではないかと、日本の例を共有しました。

同村のRT(日本でいう「組」みたいなもの)の女性たちと懇談し、この間の地域の変化についても聞きました。「回収システムが少しずつ根付いてきたおかげで、住民自身の意識も変化してきました。まだ100%とはいえないけれど、これからもっと良くなっていくはずです」と嬉しそうに話してくれました。



村内の通りからは散乱するゴミが消えた。訪問したのが独立記念日後だったため国旗メラ・プティがはためいていた。

また、家庭ゴミの回収活動だけでなく、廃油をつかった石けんづくりや食品残渣の過程でのコンポストにも関心があるのと、今後KONTINUがワークショップを実施するという話に発展しました。

よれば、村を出てすぐのところを流れている小さな川は、数年前まではゴミがあふれかえっていたとのこと。今や見違えるようになっていて、とても大きな変化だといえます。

その後11月には、同じくエコシリンプの産地である南スラ

撮っておきアジア
take a shot of Asia.

撮影場所

インドネシア

Indonesia

〔撮影者〕

ハリー・ユリ / Harry Yuli

オルター・インドネシア社 (ATINA)



01	02
	03
04	05

- 01.....最後の収穫のために池の水をギリギリまで抜いたエコシュリンプの養殖池。池を這うようにして手づかみでエビを獲っては前進する男性たち。池の畦道では、女性が自分のヤギを小屋に戻そうと追っている。
- 02.....魚とエビを収穫する父親を待っている男の子。魚を焼くために火をおこしている。
- 03.....エビ生産者を訪問するために伝統的な舟で移動するATINAのスタッフ。
- 04.....南スラウェシの「ダンゲ」というケーキを作る女性。削ったココナッツと小麦と砂糖を混ぜた生地を特殊な道具で焼く。
- 05.....牛やヤギの餌になるトウモロコシを満載したトラック。トウモロコシの上で眠っている労働者の姿も見える。

ハリーナ HALINA

2023年2月号 vol.02-no.50 2023年2月1日発行 頒価 300円(税込)

〔編集・発行〕

特定非営利活動法人 APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F

〈tel.〉03-5273-8160 〈fax.〉03-5273-8667 〈e-mail〉info@apla.jp

〈URL〉<https://www.apla.jp>

APLA

検索

APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、サポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・お申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

